
戦場へプレゼンター

天見酒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦場へプレゼンター

【Nコード】

N0740N

【作者名】

天見酒

【あらすじ】

火星に移住した人間と地球に残った人間の戦争を起こる未来の世界。地球連合軍の新米パイロットが見る戦争は。愉快的仲間達と戦場を駆ける。

天見酒初のSF作品。

配属

2253年、人類は火星のテラフォーミングに成功。2278年火星に移住した人間が独立国火星連邦を建国。2301年、火星連邦、地球に対して宣戦布告。地火戦争が始まる。同年、火星連邦に対抗するため国際連盟会議により地球連合軍結成。

そして地火戦争は続き、2332年

希望に溢れた軍学校の卒業。そして、希望に溢れた横浜地球連合軍基地への赴任。

俺に見える希望の光。先行強襲艦『黒龍』。前線で大活躍を果たし、インドを火星から取り戻した黒龍は、只今、この横浜基地でオーバーホールのために駐留中。黒龍への増員も有り得るそうさ。

そう、増員が有り得るそうなのだ！もしかしたらば、俺が黒龍へ。ニヤニヤが止まりませんな。おっと、司令室の前だ。顔を正さないといけない。

ノックをして、中から聞こえたおじさんの渋い返事に扉を開けて入る。

「三等空士、オゾラ・コウスケ大空幸助、出向しました！」

まずは元気が大切だ。上野教官、そうですね。

「ああ、ご苦勞」

しかし、デスクに座る中年男性は目下書類と奮闘中。こちらを見やしない。

この対応には少し腹が立つ。直ぐに戦地に向かう雑兵に興味は無いってか？

「来てもらって早々で悪いのだが、君の配属先は……」

全然構いません。早く言っちゃって下さい。黒龍だって。黒龍は無理でもせめて、神龍シリーズの艦でお願いします。

「戦地支援補給艦『小雨』だ」

あれ、えっ！もう一度聞いても良いですか？俺には支援補給艦と聞こえたような。

「小雨は今、四番ドッグに留まっている。では、頑張ってくれ」

あれ、おかしいな。俺、軍学校を首席卒業とはいかなかったけど二百人中七位の成績だったんだぞ。C Rコンバットロボットの操縦だけなら二位の成績だよ。その俺が支援補給艦っておかしくないですか！

と、新兵がお偉いさんに喰ってかかれる訳もなく、絶望の淵に落とされた俺は、神様を恨みつつ、基地の人に道を聞きながら四番ドッグを目指すしかなかった。

戦艦小雨。黒光りする神雨シリーズの戦艦。地球連合軍を最前線で支えて来た強襲型ステルス戦艦。宙、空、海を航行可能、その戦術的凡庸性を誇る神雨シリーズは、火星連邦に恐れられる日本の最先

端技術の結晶である。十五年ぐらい前までの話である。既に神風シリーズに場を受け渡し後、今では神龍シリーズの登場でかつての栄光は見ると影もない。

現在も地球連合軍で使われている神雨シリーズ艦があったとは知らなかった。俺がそんな時代遅れに乗艦するとは……。

小雨の黒いボディを前にして、再び絶望の溜め息が漏れる。

俺、こんな艦に乗って大丈夫なのかな……。

配属（後書き）

遂に愚かにもロボット物にも手を出しちゃいました。
天見酒風味なSFをどうぞお楽しみ下さい！

そして、ご意見、ご感想を宜しくお願いします。

補給支援艦小雨の人々

一頻り落胆した後、勝手に搭乗して良いものだろうかと小雨の前に悩む俺に呟れた声がかかる。

「あんたが今度の補充兵かい？」

軍服を着たお婆さん。片手で杖を突き、ノートパソコンを片手にこちらを伺いながら近付いてくる。階級章は大尉。

「はい、本日付けでこの艦に配属されました三等空士大空幸助です」

俺の精一杯の敬礼は返してもらえなかった。俺の腕にノートパソコンを押し付けるお婆さん。

「私は副艦長の村沢弥生だよ。ムラサワ・ヤヨイついて来な」

それだけを言うときさつさと愛想笑いすらなく先を歩く副艦長。厳しそうな副艦長だ。また、ひ弱なそうなの送って来て等、上層部への不平不満をブツブツ呟きながら歩く副艦長に俺の気分は落ちる一方だ。

俺だって、上層部に文句を言いたいよ。こんな艦に送りやがって。

「竹下、噂の新米が来たよ」

婆さん副艦長の後に続いて入ったブリッジ。俺に視線が集まる。と言っても四人だけ。四人だけですか？停留中だから、皆持ち場を離れてるだけだね、うん。

ブリッジに居た四人に、今日三度目になる自己紹介をすると小雨の

クルーの紹介が始まると俺の気分はドン底に落ちる。

真っ先に口を開いたのは、三十代だろう。眼鏡の男性。軍服より、ビジネススーツの方が似合いそうだ。

「ああ、待っていたよ。僕はこの小雨の艦長の竹下灯だ。タケシタ・トモルこれから宜しく御願するね」

新米三等空士に頭を下げる艦長……。どこぞのサラリーマンじゃないんですから。

「原田君、護衛隊を呼んで下さい。あつ、彼は通信士の原田勘助君」ハラダ・カンスケ

ヘッドフォンを付けて、音楽を身体を揺らし楽しんでいた男は、マイクを前に艦内放送を始める。命令を聞いてはいたらしい。

「俺は操舵手の鍛原な。カジワラお前は酒はいけるほうか？」

何やら琥珀色の液体の入ったプラスチック瓶をあげながら、気さくに話かけてくる操縦席に座る男。あれは麦茶だと信じたい。この艦は飲酒運転されていたりしないよな？

「砲撃手の田幡です。タバタよろしくね！」

田幡さん。まともだ！砲撃手には思えないが、唯一このブリッジでまともそうな人だ。そして、軍服が似合う美女。とても扇情的なお身体です。

「ところでさあ、大空君、彼女とか居るかな。私はフリーだけど、今夜どお？」

今夜どおって！いかん。この人危険だ！俺の貞操が。

「田幡。新米を誘惑するんじゃないよ！」

副艦長が俺の運んだノートパソコンでにじりよって来た田幡さんの頭を軽く叩く。

「ごめん。お婆ちゃん。でも、大空君。いつでも待ってるからね？」
お婆ちゃんのお陰で助かりましたよ。えーと、勇気が有ったらお声を掛けさせていただきます。

ブリッジの扉が開く。響く乱暴で煩い声。

「よっしゃあ！今度こそは男だ！鍛えがいがあぜ！」

振り返ると二mは在るんじゃないかと思う筋肉質な大男。

「俺が小雨CR隊長、轟木一平だ！トドロキ・イツペイビシビシ鍛えてやるからな」

「大空幸助です。お手柔らかによろしくお願いします」

差し出された逞しい手を握り俺はこいつトレーニングマニアかもしれない。厄介な人の元に来てしまったかなあ。

その轟木隊長の巨体の後ろから現れた女性。西洋人なのか、ポニーテールに纏めた金髪で茶色い瞳で俺を見る。スタイル抜群、何とも素敵な西洋女性。しかし、何故に木刀をお持ちですか？

「拙者、リア・フリーレスと申す。轟木殿のCR部隊に仕えている

者だ。貴殿と共に戦える事を嬉しく思う所存だ」

恭しく頭を下げる先輩。流暢な日本語だけど、これは日本語が御上手なのだろうか？

「あー、リアは侍マニアでな……。悪い奴じゃないんだ」

轟木隊長が俺に耳打ちをする。轟木隊長の耳打ちにならない声を聞き、リア先輩は柳眉を吊り上げる。

「あの……」

この二人と登場していたのに、今まで気付かなかった存在に顔を向けると、顔を反らされてしまった。

赤面して俯く少女。150cmぐらいの身長は巨体轟木隊長の隣では、さらに縮こまって見える。どうでも良いが恥じらう姿が可愛らしい。この子が俺よりも先輩だと言うのか。

「裾花さんは少し赤面症でして……。裾花さん、大空君に挨拶してください」

艦長の言葉を聞き、赤顔の中にある黒い潤んだ瞳が俺を見る。

「あ、あの裾花結スッパナ・ユイです。よろしくお願いします」

天使だ。こんなところにこんな素敵なプレゼントがあるとは！これは、こちらも赤面せざるを得ないじゃないか！

「大空です！此方こそ、よろしく願います、裾花先輩」
ああ、こんな先輩が居るなんて、地獄に天使様だ。

「アララ、大空君も結ちゃんに撃墜されちゃたかあ。悪い事は言わないから私にしておきな。結ちゃんの本気を見たら、大ショックを受けるよ」

俺と裾花先輩以外から苦笑が漏れる。裾花先輩の本気？CRの操縦技術が凄いということだろうか？目の前で耳まで赤に染まる女性がそこまで凄いのか。いや、CRの操縦技術に見た目は関係ないだろう。

「轟木隊長、自己紹介も済んだところで、大空君に彼の愛機を見せさせてください」

この艦長の言葉に俺の心は揺れ動く。俺の愛機。四神シリーズ。な訳は無いだろうな。この艦に、現在まだ各型二台ずつしか造られていない最新鋭のCRが配備されるとは思えない。各地に配備されている低コストCR流星ぐらいが妥当だろう。

「しかし、艦長さんよお。本当に新米をあれに乗つけるのか？」

あれとは何なんだ。もしかして、新造CRなのか。少し期待が高まる。

「彼は中々の成績で卒業しています。彼ならばきっと乗りこなしてくれますよ」

艦長から囁かれる甘美な言葉。俺ならば乗りこなせる。

俺の愛機。これは期待出来るかもしれないぞ。案外、俺はこの艦に乗って良かった。

補給支援艦小雨の人々（後書き）

次回、幸助の愛機とは……。。

俺の愛機

轟木隊長率いる小雨CR隊は艦尾のドッグへ俺の愛機御披露目式である。俺がこれから戦場を共にかけるCR。これに乗りたくて地球連合軍に志願した次第だ。さっきの物腰の低過ぎる艦長と今、俺の前を逞しく風を切って歩く隊長のやり取りが俺の期待を上げる。俺なら乗りこなせる機体。

「ここがドッグだ。覚えとけ！」

隊長の声に緊張はピークに達した。壁一枚隔てて俺の愛機が。横にスライドする扉、射し込む光。希望の光の向こうへ。

「いつ、一番星〜！」

三体並ぶ同型のCRに俺は驚く。こんなところでお目にかかるとは予想外だった。日本のCR製造において最大企業、柄沢工業の最高技術を誇る、地球連合軍全面配備された高性能量産CRではないか！十年前当時ではね。今では、新星、流星に圧されて、訓練生用CRに落ちぶれている。今も現役で頑張っている一番星があるとは…。

まさか俺、一番星ですか？四神シリーズとか我が儘言わないんで、せめて現在正式採用量産機の流星で、いや、この際、一代前の新星でも良いです。

「ああ、あれは俺たちの愛機な。お前のは…まだ搬入されてねえようだな」

轟木隊長の言葉に安堵する。しかし、この人達はこんな時代遅れの

機体で出撃しているのか？

「おーい、おやっさーん、ちょっとこっちに来いや！」

「てめえがこっちに来い！バカヤロー！」

「あの威勢の良いじいさんが整備班の班長だ。機体ぶっ壊すと怖えぞ。なっ、結？」

整備士の集団に向かう隊長。裾花先輩はまた顔を赤らめて頷くだけだった。でも、何て可愛らしいんですか、貴女は。

「おやっさん、こいつが新米パイロットだけだよ。こいつの機体まだかよ」

「そろそろ来るわ！ちったあ待て！それにしてもまた整備士泣かせなパイロットじゃねえだろうな」

俺の顔を睨み付ける整備班長。俺は名乗ると直ぐに返答してきた。

「俺は轟木陽平だ。この馬鹿息子の父だ。……しかし、あれに乗るのがこんな坊主とはねえ」

轟木隊長の実の父という事実より、俺はそのあれを早く知りたい。俺の機体はどこにあるんだ？

「班長ー！朱雀三号機入りまーす！」

若いつなぎを着た青年が開いた後部ハッチの向こうから声を上げる。今、朱雀って言った！間違いなく朱雀って言った！

トレーラーに乗って運ばれて来る深紅のCR。背中には四枚の翼のように附けられたCR史上最高の速度を出す高性能ブースター。地球連合軍のエースCR機シリーズ、四神の一機にして、世界に二機しかない代物。三号機と言うことならば新造されたばかりなのだろう。

何て素晴らしいんだ。この赤いボディカラー。顔が良い。まさか、俺がエース機に乗れるとは、神様、上層部様ありがとう！

「おい！なにやってんだ！朱雀は第二ドッグだ！こんなところに置いたいたら発進の邪魔になんだろが！ちったあ考えろ」

整備班長の声で俺は現実引き戻された。あれっ、俺の朱雀三号機がトレーラーに連れて行かれる。発進の邪魔になるって？

「あっあの、あの朱雀は？」

去り行く愛機に慌てて聞く俺。

「今回の任務はあいつをインド基地まで運ぶことだ。新米が四神シリーズに乗れる訳無いだろ」

隊長が笑いながら言ってくれる。そうですよね。一番星を使ってる支援補給艦の新米が朱雀に乗れる訳無いですよ。正月に祖父から大金のお年玉を貰ったら、親に貯金しておくねと取られたぐらいの落ち込みようだ。

良いんだ、俺はいつかエースパイロットになってエース機に乗ってやるんだ。今は一番星で我慢してやるよ。

落ち込む俺の袖が引かれる。裾花先輩が恥ずかしそうに引っ張って

いた。ああ、裾花先輩のその恥じらう表情がとても慰めになりました。

「貴方の機体が来たよ……」

騒々しいトレーラーの音で何とか拾えた裾花先輩の声に、ドッグに入って来たトレーラーの上を見る。

コッ、これが俺の愛機！

「これがお前の愛機『天雲』だ！』

堂々と言い放つ隊長。

「これは、また何と言う機体であろうか！」

眼を見開くりア先輩。

裾花先輩も無言ながら口をポツカリ開けている。

愛機を目の当たりにした俺から出る数々の質問。

「えっと、このCR、腕が無いようですけど」

「安心しろ。内部に作業用アームが搭載されとる」

空かさず答えてくれる整備士班長。

「えっと、足も無いんですけど？」

「坊主はこいつに必要なだと思うか？」

俺だって真面目にこいつに足を付けて欲しくは無い。

「因みにビーム兵器とかは搭載されてたりします?」

「こいつの小さなエネルギータンクでビーム兵器なんて高エネルギーな武器を使ったら、直ぐにエンストするぞ」

成る程ね。一番星に比べても機体が小さいからね。

「最後の質問は隊長に。これはジョークですか?」

「大マジだ!」

俺の思いの丈を詰め込んだ質問は直ぐに否定された。

俺の前に現れた愛機。トレーラーの上に置かれ、翼を上 to 畳んだ紺色の機体『天雲』。

「これ、C Rじゃないじゃないですか! コンバットロボット C Fですよ!」

簡単に言ってしまうえば、戦闘用飛行機。地火戦争が始まる前に、C Rの登場により消えた存在。今では偵察機にすら使われていない年代物。

こんなもので戦えと?

「うちは予算がねえんだ。だから横浜基地に眠ってたこいつを貰って来たって訳よ」

隊長が笑いながら言う。これは悪夢だ。C FでC Rと戦闘なんて自殺行為の何者でもない。

親父、今なら素直にあんたの古本屋を継ぐ気になるよ。父親に反抗して軍になんて入るんじゃ無かった。

「まあ、パイロットは機体じゃねえよ。腕だ！という訳で任務に向けて早速特訓するぞ！」

そう言って、地獄に真っ逆さまな俺を引っ張る轟木隊長。

入って早々、辞表を書こうかな。

俺の愛機（後書き）

ロボット物と言いつつ、主人公がロボットに乗らない。何じゃこりやな天見酒ワールド。

幸助がエース機、いや、せめてC Rに乗れる日は来るのでしょうか？

次回、『シュミレートで知る現実』、お楽しみに！

もう一人のパートナー（前書き）

少し長くなったので、予告変更して一旦区切ります。

もう一人のパートナー

「大空、あれだ。パイロットは機体じゃねえ。腕だよ。特訓をして、し抜けばどんなレトロな機体でも大丈夫だ!」

ならば、俺に貴方の一番星を譲って下さいよ。

「隊長のおっしゃる通りだ。弘法にも筆の誤りと言って、名人は道具を選ばないで見事な仕事をするものである。エースパイロットならば、機体を選ぶべきではなからうか?」

「……リアさん、それは弘法筆を選ばず、です」

裾花先輩の静かなツツコミで、俺への空しき慰めは終了した。そこそこ広い艦内を無言で歩く四人。

「あまり、人が居ませんね?」

俺が一番に微妙に重ったるい空気に負けた。

「最大搭乗員二百五十に六十人しか乗ってないからな。人員が回って来ないんだよ、この艦にはな」

小雨不安要素の追加。この艦、たった六十人で動かしてるのかよ……。笑いながら言えることじゃないっすね。

「ここがシュミレーションルームだ。覚えとけ。おっ、時田居たのか?」

「酷いなあ。天雲のデータを入れて置けって言ったの轟木君でしょ」

「ああ、わりい。こいつが天雲に乗るルーキーの大空だ。此方は時田政子。^{キタ・マサコ}うちの優秀な専属プログラマーな」

綺麗な人だなと思ってしまふ。厭らしい意味では無い。肩下まで伸ばした黒髪が和服が似合い、絵のモデルになっても可笑しく無い清楚な綺麗さだ。でも、俺には裾花先輩という天使が居るんだ。

「三等空士、大空幸助です。よろしくお願いします」

「君がCFに何て乗ろうとしてる命知らず君かあ。よろしくね」

俺の手を握る暖かい手と俺の心を抉る冷たい言葉。俺だって好きでCFに乗るんじゃないやい。やっぱり、CFでCRと戦うって、命を捨てるようなもんですよね……。

「早速だけどこれが君のCRキーね。あつ、CFキーかな。当然知ってると思うけど、それが無いと天雲を機動出来ないから無くさないように」

時田さんが俺の手に預ける薄っぺらなカード。CRキー、もとい、CFキー。CRを機動させるにはこのカードと指紋認証が必要である。例えば、俺が隊長の一番星や二番ドッグに眠る朱雀を使って勝手に出撃ということが出来ないのだ。俺が乗れるのは天雲だけ。

「丁度良く私自慢のナビはもうそれに入れてあるから、早速、初期設定しちゃおう。シュミレーションシートに座って、CRキー、あつ、違った、CFキーを入れて」

時田さんが、今にも口笛を吹き出しそうなお機嫌で、わざわざ俺の心を傷付ける訂正をしてくれる。

それにしても、ナビ。AI（人工知能）によってパイロットに変わり、愛機のコンピュータの管理、索敵や戦術的助言をしてくれる愛機に次ぐ、もう一人のパートナー。ナビの性能も戦果では大きな違いだ。訓練生は貰えないパートナー。最近AIも発達していて、生身の人間の感情にかなり近い物を持った物もあるそうだ。その技術革新は、パイロットとナビの相性という問題を産む。当然、俺は相性の良い奴が良い。

指示に従い、シュミレーションシートに腰を下ろし、CFキーを投入口に差して、シュミレーションヘルムを被る。景色は変わり、機械に囲まれたコックピットに。機外の周囲は真っ白な空間が何処までも続く。その景色を遮り、俺の目の前に開くモニターウィンドウ。響く合成音声。

「ナビゲーターシステム初期設定ヲシマス。名前ヲ入力クダサイ」

片言かよ！まあ、ナビに期待はしていなかったけど、もっと人間らしい気さくなナビが良かったな。

指示に従い、名前を確認を含めて二度入力する。モニターウィンドウはR o r d i n gを表示している。

俺は暇を持て余して、両腕を枕代わりに頭の後ろに回して、シートに深く腰掛ける。ああ、ナビも単調台詞な旧式か。噂では、ロリータ口調のナビを特注搭載する気味悪いパイロットも居るそうだ。俺はそこまではいらぬが女口調のナビとかには憧れたもんだ。

『自分、何なんや！その態度わ！俺の初御披露目やぞ！もっと、ソ

ワソワして待つとか、拍手の用意をして待つとかあるやろ！けったくそ悪いわぁ、ホンマに」

コックピットに響く合成音声で造られた男の声。いきなりで心臓に悪すぎる。

『こんな坊主の世話焼かなあアカンなんてホンマ最悪だわ！』

「なっ、お前、ナビの癖に態度悪すぎるぞ！」

『はっ！新米パイロットに何で優秀ナビな俺がヘコヘコせなアカンのや！』

『大空君、早速私の自慢のナビと仲良くなったようだね。とっても馴染み安いナビでしょ？』

急に開いたモニターウィンドウに映る喜色満面な時田さん。その自信は何処から来るんですか？

「あの、このナビのAI色々と問題ありません？そして、何故に関西弁ですか？」

『え？ナニワのAIは私の自信作だよ。欠陥なんて全然無いよ。実はナニワは神戸基地の知り合いに頼まれて、馴染み易いように関西弁で造ったんだけど。持ってたらか故か要らないって言われちゃってさあ。失礼だよなぁ』

ナニワってこのナビの名前か？俺はとても神戸基地の知り合いさんの判断が正しいと思う。

『おい、時田はんよお。俺はこんな生意気な小僧のナビなんか……』

『あんまり、我が儘言うと、消去しちゃうぞ』

『ほな、大空君！早速、仲良くシュミレーショントレーニングしようや』

創造主は強し。態度が一発で良くなりやがった。

俺はこれからこのとても人間臭いナビと上手くやっていけるのだからか？

もう一人のパートナー（後書き）

関西弁。書いたは良いが間違っているかも知れない。

もし、関西弁はこんなじゃないわ〜！とお怒りの方は天見酒にご一報を。

シュミレートに見る現実問題

「そうや、だんだんようになってきたやんか。おい、スピード上げすぎやって。ちよい落としいな。現実でそんな速度で飛んどったら、旋回出来ずに障害物にぶち当たってお陀仏や」

悔しいがナニワのナビは凄い。しっかり天雲の構造を理解し、俺に的確に分かりやすく操縦法を教えてくれる。確かに優秀なナビではあるようだ。

「アホンダラ！そんなにスピード落としたら、敵の良的や！」

「あつ、スマン」

少々口が悪いのが珠に傷なAIではあるが、一緒に架空空間を飛んでみると時田さんの言うように案外馴染み易い相棒だ。

「まあ、ええわ。操作方法もある程度慣れたところで、戦闘訓練に移ろか。今、隣のシュミレーターでドンパチやってる隊長さん達のシュミレーションに繋ぐわ」

「待ってました！」

「自信満々やなあゝ自分」

こんな真っ白空間を只飛んで空弾を撃つだけよりは敵機が出てきてくれた方が良い。

しかし、俺はナニワの言う通り自信が有り過ぎた。地獄を知った。

シュミレーション砂漠戦。敵機三十。CR三機とCF一機。これだけで無理ゲームだ。

『大空！当たらなくても良いから弾幕を張りまくれ。数撃ちや当たる！ちっ、弾切れか！俺は一旦補給に戻るぞ』

しかし、隊長、器用に敵機の銃撃を交わしながらも撃ち続ける操作腕はお見事です。ただし、無駄弾が多すぎませんか？

『隊長殿、飛び道具などに頼り過ぎです。武士ならば刀一本で十分です。あつ、エネルギーが切れか』

リアさん、それはそうですよ。敵機の弾幕を細やかな急旋回で交わして懐に入る技術は凄いです。高熱伝導ソードなんて、エネルギーを馬鹿食いする兵装を連続使用していたら、一番星のエネルギータンクでは直ぐに空になりますよ。

そして、俺の右目の前に開く通信ウィンドウ。

『新米！何、チヨロチヨロと逃げてんだよ！シュミレーションでビってるんじゃないぞ！降りて来て戦いやがれ！テメエ、タマついてんだろうが！特攻して、一機でも落とすぐらいの気合いを見せやがれ！』

「ハッ、ハイいゝ」

俺からは情けない返事が出ました。シュミレーションにビビってる訳では有りませんよ。眼下で敵CRに蹴りをかます一番星。黒いボ

デリーの肩に白くペイントされた3。

『私の前に立つんじゃないよ。雑魚が！』

モニターに映る勇ましき可憐な少女の顔がほくそ笑んでいる。怖いっす。どうなされたんですか、裾花先輩。

『あほ、何やっとお！被弾したやん。これで落ちたの何度目や！本番やったら、確実に自分死んどんぞ』

しまった！裾花先輩の檄に氣を取られて、三度目の撃墜を記録してしまった。周囲は代わり、無人の小雨のドッグの中、リスタート地点に戻された。

『幸助〜！テメエ、何回落とされりや氣が済むんだ！いい加減にしとけよ、ドシロウトかテメエは！それとも、テメエはケツに火付けられて、喜ぶドマゾかよ！』

お願いです、裾花先輩。そんな可愛いらしいお顔で、ケツとかのスラングを吐かないで！俺の精神がどんどん壊れていきます。普段の（？）天使な裾花先輩はいずこに行かれたのですか？

この地獄の特訓は後三時間続く。

シュミレーションシートを降りた裾花先輩は、頬を赤らめながら、背丈の関係上必然的にそうなる上目遣い俺に「…お疲れ様でした」と激励の言葉を下さいました。俺の先輩を見る目は出会った数時間前の時とは明らかに変えさせられましたけどね。

隊長いわく、裾花先輩は少しドライバーズハイの傾向があるそうで

すよ。

辞表用の封筒、何処に売ってるかな？

小雨、発艦！

地獄のトレーニングで、体力も精神力も使い果たした俺は、艦内自室に案内された後、ベッドに倒れた。そんな寝耳に艦内放送。

『皆様、御早うございます。艦長の竹下です。当艦は皆様ご存知の通り、本日午前十時を持ちまして、横浜基地を発ちます。乗組員の方々は九時半までには必ず乗艦している事をお願い致します。最後になりますが、CR隊の方々は御手数ですが、九時半にブリッジの方へお越しく下さい。ご報告は以上です。今日も一日頑張りましょう』

えーと、これは軍の指令通達なのでしょうか？それとも、社内連絡？とにかく九時半にはブリッジに行かないとな。

着けたまま、寝てしまい腕を痛くした原因である腕時計を確認。八時か。昨日、あの地獄から解放されたのが、六時前だから十四時間も寝ていたのか。それだけ疲れたって事か。

九時半まで有った一時間は自室のシャワーを使い、迷いながらもたどり着いた艦内食堂での食事ですぐに無くなった。

「おはようございます！」

軍人たる者、いや人間ならば元気良い挨拶を心掛けるべきだ。

「ああ、お早う。良く寝れたかい？」

「あつ、はい。ぐっすり寝させて頂きました」

返事をくれたのは副艦長だけというよりブリッジはガラガラ。他には、音楽の世界へとトリップなされている原田さんと俺の挨拶に少し頭を下げるだけの裾花先輩のみ。

他の面々はともかく呼び出した艦長はどうした？

「遅れて申し訳ありません！少々此方の方で立て込んで下りまして！お呼び立てしておきながら当人が遅れるとは、お詫びのしようも無い次第で」

轟木隊長とリアさんと共に、開いた扉から現れ、ペコペコと頭を下げる艦長。いや、二、三分遅れただけですし、隊長達も遅れて来たし、貴方はこの艦のトップなんですから、お詫びしなくても良いと思いますよ。

「竹下、そんなことやってないで早いところこの新米に今回の仕事を教えてやりなよ。あと、原田！あの酔っ払いと色情魔を呼び出しな」

何ででしょう。このお婆さん副艦長が、艦長の鑑に見えます。この艦、唯一の良心だ。

「そうでした。早急になりますが、時間も無いことですし、今回の任務について説明をさせて頂きます」

轟木隊長に並ぶリアさんの隣に行く裾花先輩。俺もその横一列に加わる事にした方が良さそうだな。

「デュリズル、世界地図を出してくれませんか？あつ、デュリズル

と言うのは、時田君の造ったこの艦のコンピューターの制御ナビでして、少し寡黙ですが優秀なナビですよ」

開いたウィンドウに世界地図を映るとナビの説明を挟む艦長。寡黙なナビ……。時田さんは性格に難のあるAIしか造れないのでしょうか。

「私達の任務は今いる横浜基地から、黒龍の奪還したインドのカルカタ基地へ補給物資を届ける事にあります。今回の航路は……」ウィンドウの世界地図に現れる航路。確かに仕事の早いナビだ。

「チベットを通んのか……」

「そうです。海路を通っても良いのですが、火星の潜水艦は厄介です。そこでCR隊には警戒を怠らないようにして頂きたいのです」

隊長のぼやきに答える艦長。火星は中国からの独立を餌にチベットに協力させている。強力な軍隊があるわけではないが、火星から貫ったCRによる神出鬼没なゲリラ攻撃は、地球連合軍に手を焼かせている。

「全二日の行程です。明日にはチベットに入りますが、攻撃を受けない可能性もありますし、チベット以外で不意撃ちに合う可能性もあります。各自、気を引き締めて頑張ってください」

俺の初陣は明日になるのか。今日は寝れるかな。

「あー、二日酔いだあー。これは迎え酒が必要だな……」

「あら、大空君。昨晚はどうしたの？お姉さん部屋で待ってたのに」
艦長の説明が終わったと同時に入って来る酔っ払いと色情魔。各々
個性的な挨拶をして各々の席に着く二人。ところで梶原操舵手、今、
一杯煽った液体には勿論、アルコールは入って無いですよね？

「ブリッジクルーも全員揃いましたし、予定通り後三分で発艦出来
そうですね」

「えっ、ブリッジクルーってこれだけなんですか！」

「地球連合軍も人員不足でして、この艦には人があまり回ってこな
いんです。でも、皆さん優秀でして、一人で数人分の働きをしてく
れてますので、大丈夫ですよ」

いや、いくらなんでも、副操舵手も、サブオペレーターも無しなん
て。本当に大丈夫なんですよ。それよりも俺は今から降艦しても
良いですか。

無情にもドッグの赤灯が回りだし、青空な景色と明るい陽光を注ぎ
込みながら上部ハッチが開いて行く。既に乗降口はロックされてい
るでしょうね。

「…了解しました。艦長。管制塔のお偉いさんが航路クリアだか
ら、とっとと出てけ、とのことですよ」

原田さん、本当に管制塔のお偉いさんがそのいかにも厄介払いする
台詞を言ってそうで怖いです。

「では、梶原さん。出航しましょう」

「りょーかい」

えっ、ここは『戦艦小雨出航する!』とか格好良く言うシーンじゃ無いんですか。この艦長が俺の気分が盛り上がる台詞言う訳無いですよね…。

俺のテンションがだだ下がりの中、小雨のメインエンジンが点火。徐々に下降気味な俺の気分が上向きに。小雨が地を離れる。俺は今から戦地へと飛び立つのだあー!

「梶原さん。右に寄りすぎっすよ」

ドッグから艦橋が出た感動的瞬间に右翼が壁に接触。派手に揺れる小雨。原田さん、忠告遅いっす。

「何やってんだい!」

「ウッセェよ、近くで怒鳴んな、婆ちゃん。ちょっと擦っただけだろ。それに避けねえ壁が悪いんだよ」

餓鬼の言い訳ですか、それは。俺には理解出来ません。その屁理屈もこの人が操舵手やってるのかも!

「…梶原さんの気持ち分かります」

裾花先輩、この大人げ無い言い訳を分かちやうんですか!

「：前をノロノロの走ってる邪魔な車をせっついて怒られるって嫌ですよね」

やったことあるんですね？そんな可愛い顔して。CRだけじゃないんですね、貴女が悪魔になってしまうのは。

「結衣ちゃん、私も分かるよ。トロい車見ると、私の車にミサイル付けたいなあ〜って思うもん」

田端砲撃手、それで何を撃つつもりですか？

「艦長。管制塔から、映像通信です」

『竹下〜！テメェ〜またやりやがったなあ〜！何度、うちのドッグを傷付ければ気が済むんだ！』

「申し訳ございません。今後このような事は無いように致しますので、何卒、御勘弁の程を」

管制官殿が怒るのも仕方ないです。そして、一生懸命に謝る艦長。土下座を始めそんな勢いだ。

「そんな必死に謝る事でもねえのに」

梶原さん。あんたは反省しろ。戦艦運転しながら酒を煽るな。そして、何故誰も止めない？大事故になるよ。何で皆さんは平靜なのですか？ああ、この艦の非常識な常識なのですね。

大空幸助、悟りました。

辞表の前に遺書を書いておこう。

お父様、お母様。幸助は戦死すら出来ずにこの艦と運命を共にする
かもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0740n/>

戦場へプレゼンター

2010年10月16日05時12分発行